

## 辞書 Vol.2

前に英語の辞書の話をしました。英語についても一つお話をします。

私が、初めて海外に行ったのは、大学院博士課程の時です。25 か 26 才ごろの時だったと思います。ドルの持ち出しに制限があり、パスポートに海外へ持ち出すドルの金額を書き込まれた時代です。

指導教員の都合により、私がシカゴ郊外にある研究所フェルミラボというところに行き、原子核乾板(写真フィルム的一种)でできた装置に 400GeV の陽子ビームを照射し、シアトルにあるワシントン大学で現像してもって帰ってくるという仕事でした。

飛行機に乗るのも初めてでしたが、フェルミラボまでは同じ目的の日本人と 3 人旅でしたので、飛行機のチェックインの仕方、サンフランシスコ経由で一泊しましたが、そこでホテルの予約の仕方など、後ろから見ていました。帰りは一人でしたので、この直前学習がとても役に立ちました。

フェルミラボは、国際共同研究が普通に行われている研究所なので、その所員は下手な英語になれているし、所内でやりたいことは大体決まっているのでそれなりに英語は通じましたが、一歩外へ出るとなかなか英語が通じませんでした。

そして帰り道、シアトルからサンフランシスコへの飛行機が予約がとれずキャンセル待ちの状態でした。こんな状況で出発してしまったのですから、わからないということで、大胆なことをしたものです。キャンセル待ちと言うのが "standing passenger" というのも、その場で実地に学びました。キャンセル待ちの順番の番号がついていますが、どの番号まで乗れるようになったのか知りたくなりました。英語で何と言うのだろう、「キャンセル待ちの番号はどこまでいったのだろうか」を訳せばいいのだろうか、動詞は何を使うのだろうか、と悩んでいたら、他の人が "What number?" と聞いて用を住ませました。なるほど、会話というのはこんな具合にやるのだな、と納得したものでした。必ずしも、主語、動詞で完全な文を作る必要がない、ということを理解しました。

10 日間ぐらいの旅でしたが、その間に話した言葉の一つ一つが記憶に刻まれるような、非常に密な時間をすごしました。

この経験があったおかげで、海外生活を送ることになりましたが、それへの障壁が低くなりました。